

「次世代に響かせる伝承」～閑上で感じ、考えたこと

東日本大震災から13年経った今、人々は津波という災害に向き合っているだろうか。もし当時と同じ津波が来たとしても、素早く逃げられるだろうか。震災は危険なもの、恐ろしいものと記憶している体験者がいる一方で、震災を体験していない世代はどう感じているのだろうか。私は閑上取材する機会を得て感じたことがある。初めは、この街に津波が押し寄せ、何もかも流されてしまった場所なのか、と思う実感はできなかった。が、取材していくうちに、当時の状況や被害に実感が湧くと同時に、体験者の話を聞くことは大切であるとも感じた。取材する中で、体験者たちが口をそろえて言ったことがあった。それは、「津波が来ると思っていたなら…」という言葉。そして、伝承の大切さについて教えてもらった。そして、これからの「伝承」の在り方について問題意識を以て考えた。

体験者が語る言葉の大切さ

閑上の人々取材した際、彼らが口をそろえて語った「津波が来ると分かっていたら…」という言葉。それは、どういう意味なのだろうか？ 閑上中央町内会長の長沼俊幸さん(61)の話を紹介してみたい。

「昔から、閑上は港町でありながら『津波が来ない』と言われ、それは親からも聞かされていた。日和山公園に昭和8(1933)年の『昭和大津波』の教訓について書かれた石碑があるが、ほとんどの人が気づかないほど、忘れられていた」と語った。しかし、2011年3月11日、東日本大震災の津波が押し寄せたのだ。

午後2時46分の大地震発生直後、津波が来ないと思って海を見に行った人や、家から出ない人が多かった。その結果、大きな犠牲と被害が生まれてしまったのだ。津波が来ることが分かっていたら海にも近づかず、また、家からすぐ避難していただろう。だからこそ、「津波が来ると分かっていたら…」という言葉が語られたと感じた。

伝承というのは時に人の命を奪う。この話を聞いて、そう思い、伝承の仕方を考えていかなければいけないと取材を通じて考えた。では、震災を体験していない世代には、どのようにして伝えていけばよいのだろうか。今、SNSなどさまざまなメディアがあるが、どのようにすれば伝承を響かせられることができるだろうか。次の災害で同じ被害を繰り返さないためにも、この問題を考えていかなければならない。

「次世代に響かせる伝承」とは

震災後、被災地の学校では、当時の被害についての語り伝えや避難訓練などが行われている。私も実際に体験した。福島県出身であり、津波の話震災後、被災地の学校では、

当時の被害についての語り伝えや避難訓練などが行われている。私も実際に体験した。福島県出身であり、津波の話や福島第一原発事故の話などについて聴いてきた。そこでも感じてきたことがある。

震災を知らない世代は果たして、関心を持って聴いているのだろうか。何度も同じ話をされて、関心興味を薄れさせていないだろうか。では、災害に対してどのようにすれば興味、関心を持たせられるだろうか。

私は「響かせる伝承」を考えた。まず、被災した現地に実際に連れていくことが大切だと考える。座学だけではなく、実際にそこで、どのようなことが起こったのか、当時の記録や写真と比較して考えさせる。その後、体験者から詳しく説明してもらうことが必要になっていく。また写真や動画を見て、その時の被害状況などを、追体験させるように考えさせるのが良いだろう。

将来の「減災行動」にもつなげたい

参加者が自分なりに「どのようにすれば被害が減るか」を考え、発表する時間を設ける。参加者の全員が、災害について考え、これからの取り組みに意見を集中させることが大切になっていくと考える。こうした試みを行っているところもあるだろうが、一回きりではなく、毎年違う視点から見つめ直したり、同じ事柄でもより深く掘り下げたり、伝承を重ねながら考えさせていくことが一番響くのではないだろうか。

この取り組みを実践できれば、震災を体験していない世代も自ら考え、行動できるようになり、もし将来の「減災」の行動にもつながっていくと私は考える。これからの伝承は、伝えることも大切だが、「自ら考えさせる」取り組みが必要になるのではないだろうか。津波という恐ろしい出来事を、体験しない世代に教える「伝承」の在り方を、さまざまな形に進化させていくことがこれから大切だ。「次世代へ響かせる伝承」を提案したい。

震災を経た閑上の「つながり」～失ったものをつむぐ

2011年3月11日に発生した東日本大震災から、まもなく14年の月日が経とうとしている。あの日の津波の被災が甚大だった名取市閑上地区は、古い漁港の街と800人近い命だけでなく、それまでの生活をはぐくんだ住民同士の「つながり」を失った。震災後、市は「現地再建」の方針を掲げ、仮設住宅で支え合った住民たちは再び、それぞれの生き方の選択を余儀なくされた。「つながり」は永遠に失われたのだろうか？ いや、そうではなく、新しい街づくりにも、「つながり」の再生を模索する住民の懸命な努力があった。彼らがつむぎ直してきたものを、閑上住民のインタビューから考えたい。

震災が分断した「近しい」つながり

名取市閑上。漁業が盛んな、四百年来の漁港を持つ歴史ある町である。地元で生まれ育った閑上中央町内会長である長沼俊幸さん（61）は、震災前の古里を「隣近所同士、家のカギを掛けなくても、大丈夫な町だった」と語る。土地に住む人々とのつながりが深く、人間関係が濃密で近しい町であった。日々の生業を営む中で、互いに手を取り合い、何十年、何百年も掛けて熟成されてきたつながりが、震災前の閑上には存在していた。

閑上の人々は、あの日の津波の被害により、古い町並みと多くの人命だけでなく、長年ここで生きてきた住民同士のつながりを失うことになった。

長沼さんは「閑上に津波は来ない、という誤った伝承が住民の間にあり、避難が遅れてしまった」と振り返る。また、閑上の復興を目指す過程でも、住民それぞれの立場は異なっていた。

復興計画をめぐる市の調査では、「閑上に戻りたい」という意向を示した住民はわずか25.2%だった。市の方針として「現地再建」を目指してしたもの、実際の声として、多くの住民たちは再びの津波を恐れ、内陸部へと移転すること、被災地から離れることを望んでいた。しかし、結果として閑上の街の現地再建が進められ、市と住民、住民同士の間においても分断が生まれ、それまで閑上の人々が長くつむいできた人のつながりを、津波に続き二度にわたって失うことになった。

住民を支えた「TASKI」の交流活動

震災を経て、新たにつながることでできた関係もある。避難所、仮設住宅での生活を余儀なくされた閑上の人々を支援する活動が活発に行われた。中でも、閑上の人々を元気づけたのは、学生を中心とする「継続的」な支援であった。

地元名取市の尚絅学院大学では、学生ボランティアチーム「TASK I」が2012年から活動を開始し、閑上の被災者との交流を中心に、防災・減災に関する活動も行っている団体である。TASK Iは、震災発生後の初期段階から同大学の職員、学生が始めた支援活動を受け継ぎ、仮設住宅での「お茶会」や「編み物」などの交流イベントを継続してきた。

14年ごろから住民の主体的に活動することも増え、TASK Iは「お手伝い」から「支える」役割に、ニーズに合わせて活動を変化させていった。現地で取材した住民の一人は「お茶会のような気軽な活動に心を支えられた。交流で仲良くなった人とは、今でもつながっている」と語っている。

新旧住民融合へ継続性ある取り組みを

震災を経て、さまざまな人々の支援、現地再建を志す人々の努力が実り、2019年5月26日に、現地に再建された閑上の「まちびらき」が開催され、新しい商業施設などが生まれ、街は活気を取り戻しつつある。閑上への移住者も増加しており、現在は新旧住民の新しいコミュニティを構築することが課題となっている。

閑上中央町内会長の長沼さんは、その取り組みが思うように結果と結びつかない悩みを語ってくれた。「町内会のイベントを行う際に、若い住民たちに声を掛けるようにしている。でも、なかなか距離感が縮まらない。交流のきっかけをつくることが大事」と、手探りしているのが実情のようだ。

東日本大震災から14年が経とうとしている。新しい街の整備が進みつつあるからこそ、かつてのような人と人のつながりの再生は真の「復興」の課題として浮上する。これは先が見えず、明確な解答のない課題であるが、交流において必要なことは、継続性があり、回数を重ねる取り組みだ。そのことは、TASK Iの活動と成果を通して証明されている。

今は手応えがなくとも、継続して活動を行うことで～震災前の閑上の姿とは異なるだろうが～、今を生きる人にとって暮らしやすい環境になっていくだろう。一般の人から閑上は、悲劇の被災地という見方をされやすい。しかし、今を生き続け、失ったものをつむぎ続ける人々がいることを忘れないでほしい。

「復興」をめぐる見解の相違～住民の願う復興を行政は行えているのか

2011年3月11日に発生した東日本大震災から14年が経過する。当時小学生1年生だった私は今、大学生生活の終わりも近い。あらためて「復興」の意味を深く考えさせたのは、宮城県名取市閑上での長沼俊幸さん（61）への取材だった。震災の影響と、その後の歩みを振り返りたい。

高齢者に寄り添わぬ住宅

閑上で生まれ育った長沼さんは、大震災の津波で自宅の屋根に奥さんと上ったまま流され、九死に一生を得た後、仮設住宅を経て2017年、現地に再建された街に戻り、閑上中央町内会長を務めている。

大学の授業の取材で長沼さんは、市が発注した災害公営集合住宅（6階建て、5棟）の整備が「住民の心情に寄り添っておらず、特に高齢者にとって不便な設計がコミュニケーションの壁を生んでいる」と指摘した。入居者は、出身地域よりも、行政が「公平性」を優先したくじ引きで決まったため、互いに知らない人同士が多かった。長沼さんら町内会が目指す「コミュニティの再生」には困難が伴った。

特に「高齢の独居者が多く、引きこもりを防ぐための配慮が自治会の重要な役目になった」と長沼さんは語る。尚絅学院大学のボランティアチーム「TASKI」の学生ら、仮設住宅時代からつながった人々の継続的な支援など、年配の住民を支える若い世代に助けられているという。

古里の絆、当事者の思いから

震災後の閑上の歩みを振り返ると、名取市は当初から「現地再建」を方針として掲げた。帰還意向調査を実施した結果は、多くの住民が津波への恐れから「戻りたくない」、「内陸に移転したい」と答え、実際に帰還したのは旧住民の3分の1に過ぎなかった。

長沼さんは、本来の住民同士のつながりが失われたことを「復興」の消失として悲しみ、行政が住民の心情に配慮せず、成果や外部の評価を重視する姿勢に失望感を抱いていた。「復興」とは単に物理的な再建だけではない。長沼さんが「うざい町だった」と愛着を表現した住民たちの濃い絆や、当事者の思いから出発することが何よりも重要であると感じられる取材となった。

「当たり前でない」生活への感謝～震災後の閉上で生まれたもの

2011年3月11日、東北の多くの市町村を被災地に変えた東日本大震災。その一つ、名取市閉上は震災後14年が経とうとする現在も、「復興」へさまざまな課題を背負う。閉上中央町内会の副会長、民生委員の櫻井幸子さんは、津波で夫や友人を亡くし、その辛い経験からの再出発をした。以前は当たり前だったという生活が震災後には「当たり前ではない」日々であることに気づき、感謝や幸せの気持ちを持つようになったという。普段、支障をきたすことのない生活を送る私たちには見えない「震災後」があった。

苦難の日々

あの日の津波で閉上は、約750人の犠牲者とまちの風景を奪われた。震災がもたらしたものは、これらの目に見えた被害だけではない。それは、そこに暮らしていた一人一人の住民が築いてきた幸せだった。家族や友人達と当たり前と思い過ぎてきた、普段の日常が突然、形もないものに一瞬にして失われた。そこには、それぞれの人々にとって、誰にも理解できない辛い思いがあるはずだ。

私がインタビューをさせてもらった櫻井さんは、あの震災で大事なご主人や友人を亡くした。この辛い出来事により、家から出ることも難しくなってしまったという。「人が周りからいなくなるのが怖い」と当時の状況について振り返った。閉上にはそのような経験をした被災者が大勢おり、現在でも人と関わるのが難しい方もいるようだ。櫻井さんは当時の心境について「明日をどう生きればよいか分からなかった」と、それからの生活が不安で途方に暮れた日々を過ごしていた。

震災からの再出発

辛い状況にあって立ち上がれない中、櫻井さんは周りの住民から民生委員の仕事への誘いを受けた。それを引き受けたことで心は前を向き、新しい生活へ出発できたという。「これからは、自分が経験したような辛い思いをしている人たちを助きたい」と思いを一新して活動に取り組んだ。

日々、町内会副会長や民選委員の仕事で大事にしていることを聞いた。そこで知ったのは、櫻井さんがある信念を持ち活動していたことだった。それは、「認めてあげること」、「ほめてあげること」、「感謝をすること」。閉上には、家族を震災で亡くして独りで生活する人もいる。辛いときに自分の話を聞いてもらい、共感してもらいたい時がある。そのような時に「共感して、元気を出してもらいたい」と語る。

また櫻井さんは、住民の集まりなど交流の機会がある際は、全員に平等に接することを意識しているという。それを心掛けることにより、誰もが嫌な思いをせず会話できる。「自分が辛い思いをした分だけ、人に思いやりを持って接することができる」と感じた。思いやりは、どんな時でも人間にとって一番必要なものだ改めて気づかされた。

生活に「感謝」を

櫻井さんにインタビューした中で、とりわけ印象に残っていることがある。それは、「生活できていることが一番の幸せ」という言葉だ。私たちは普段何気なく日々の生活を送っている。そんな人も少なくないはずだ。「何気ない」と感じることは、これまで送ってきた生活と時間を当たり前のことと感じているからであろう。食べて、仕事や学校に行き、家に帰って眠る、これらの動作一つ一つが出来ることは、命があり、健康で、周りに恵まれているからこそなのだ。

私は閑上の歩みを調べ、櫻井さんに出会い、震災から今に至る思いを知った。そんな自分自身が、心から幸せで恵まれていると感じた。しかし、私たちの誰にも大震災のような災害が起こる可能性は十分にある。もし起こってしまったとしても、櫻井さんの信念のように、周りの人に共感すること、感謝すること。それらを大事にするべきだ。

最後に、彼女の素敵なお日課を紹介したい。それは、「月が見えたら、空を見て感謝をする」ことだという。感謝を毎日欠かさずする。この記事で何度も書いてきたが、本当に大事なことだ。櫻井さんのような人たちの思いを無駄にせず、支え合って生きる姿を伝えたい。

知っていますか？「被災後の生活」～いま閑上の人々の体験を聴く

2011年3月11日の東日本大震災が起きた時は、進級を控えた小学1年生…そんな私も今では大学生で就活の年齢になった。震災の被害もほとんどなかった地域で暮らし、被災とはどんなものか、よく分からないまま、テレビの報道くらいの知識しかなかった。でも、授業で名取市閑上を取材する機会があり、テレビで見ることのなかった被災地の現実に触れた。ここでは震災の後、どのような変化が体験されてきたのだろうか。想像のつかなかった「被災後の生活」を、閑上で出会った人々から聴いた。

2人の当事者から体験談を聴く

私が取材したのは、閑上中央町内会長の長沼俊幸さん（61）と樋口きいさん。震災後の生活環境に関する体験談を聴かせてもらった。

長沼さんは津波で奥さんと家ごと流された被災体験の後、家族と名取市内の体育館の避難所2カ月半を過ごした。体育館の避難所と聞くと、私は段ボールを想像する。段ボールで、自分の生活スペース（部屋）の区切りを作り、それが人の数だけ作られているというイメージだ。しかし、話を聴いてみたところ、そのダンボールは最初から用意されてあったわけではなかった。避難所生活を始めてしばらく時間が経ってから届いた。他の避難所で段ボールの仕切りを見た人の話が伝わり、長沼さんが市役所に掛け合って、やっと避難所に届いた。

それまでは、仕切りがないため周りの人から見られているように感じ、誰にもストレスが溜まっていた。しかし届いてからは、やっとプライバシーが確保され、前よりは過ごしやすくなったそうだ。

お風呂は自衛隊の移動入浴設備、バスで連れていかれる入浴施設の2つがあった。お風呂があるといっても半月近く入れない時もあるため、健康で快適な生活からは程遠かった。食料は毎日配布されており、おにぎり、菓子パンが多かったが、それを食べていた。

仮設住宅でのトラブルや過ごし方

樋口さんが過ごした名取市内の仮設住宅には、布団や食器、家具、主な電化製品などがすでに支給されて揃っており、「後はお金があれば生活できる」という状態だった。また、仮設住宅では元の家から物を持ち込むこともできた。

モノが既に揃っている、持ち込み可能と聞くと、先ほど述べた体育館に比べたら普通の生活はしやすそうに感じる。しかし、避難所で生活する人は皆、被災している。家から道具を持って来た場合、津波で家や物がすべて流されてしまった人から一言、境遇の違いについて言われることもあった。

避難所、仮設住宅での生活の環境、体験は人によって異なるが、樋口さんが住んでいた仮設住宅はすでにモノが揃っていて、お金があれば生活できるような環境だった。反対に体育館の避難所は、元々が住む場所ではないこともあり、生活するには適していない。仮設住宅は最初から部屋ごとに仕切られているが、運動する場所である体育館で仕切りは基本的にはない。そのためダンボールが届くまでは人の目に晒されてしまう。生活を営むにしても体育館では最低限のプライバシーすらまともに守れない状況だ。

なぜ体育館では最低限の生活もできなかったのか

その原因は、運営と支援の責任ある市役所などが災害に対応できていないことだ。災害、それも避難所が求められるレベルのものとなると、経験者が少なくなる。避難所で生活していた人も、そこで世話役として働いていた人も、こういう時にどう行動すればいいのか分からなかった。

名取市の場合、市役所には避難所で使用するダンボールが保管されていたが、長沼さんが指摘し要求してから送られてきた。つまり、当事者から求められなければ段ボールなしの生活を送らなければならなかった。

そうした被災者のニーズの情報が市役所で共有されず、長沼さんは「当事者にも役所にも一時的な体験のため、きちんと記録、検証、伝承されることがなく、次の、別な土地での災害の時に生かされない。同じことが繰り返されている」と指摘する。

どうすれば、被災者本位の避難所ができるか

「避難所」と一括りに言っても、場所によって生活環境は異なる。それは体育館を利用したモノなのか、新しく建設されたものか、支援する側の情報伝達がうまくいっているのか、いないのか。インタビューした仮設住宅の経験者は、「お金があれば生活はできる」（注・生活環境は人によって異なる）と話していたが、体育館ではそもそも最低限の生活に必要な物資が少ない、というトラブルがあった。

このことから私は、災害時だからこそストレスなく生活できる避難所を作るべきだ、と考えた。災害が発生した後は精神的にも追い込まれている方が多い。そんな中、ストレスのた

まりやすい環境で生活をすれば自然と、トラブルが発生するはずだ。そして、そのトラブルによってさらにストレスが溜まり、殺伐とした雰囲気生まれる悪循環が生まれてしまう。この状況を繰り返さないためには、支援する側が体験者の意見を聴き、検証、共有し、災害時だからこそ、ストレスを和らげ快適に生活できる避難所づくりが必要だと考える。

伝えられなかった場所～被災者が語る「避難所」という体験

2011年3月11日に起きた東日本大震災から、もう14年が経つ。津波によって歴史ある街と多くの命が失われた名取市閑上。住民の一人で、現在は自治会長の長沼俊幸さん（61）を取材し当時の体験を聞いた。多大な苦難を知る当事者として、「避難所」という場所、そこで起きた出来事が、被災を体験していない人たちに知られていないと長沼さんは訴える。24年の元日に能登半島地震が発生し、現地からのニュースで見たものは「あの頃と変わらない避難所の景色だった」。なぜ、自分たちの辛い経験が活かされていないのか、憤ったという。被災者を救うべき「避難所」には、現在に至るまでどのような問題があるのか。当事者の直言を聞いた。

東日本大震災での「避難所」の姿

「避難所にいた時は、みんな平常心ではなかった」。東日本大震災での避難所の生活は「普通ではなかった」と長沼さんは語った。あの日、長沼さんら閑上で被災した人たちは避難所生活を余儀なくされた。避難所では、家族ごとの生活スペースに仕切りはなく、体育館の冷たい床の上で過ごすことになった。

その際、別の避難所を訪ねた人から「段ボールのベッドや仕切りが置いてあった」という情報を聞き、長沼さんは運営する市の担当者に伝えた。すると、「段ボールなら市役所にたくさんある。皆さんも使いますか」との答えが返り、長沼さんはこの時初めて声を上げて怒ったという。市の担当者も初めての経験で何が正しいのか、分からなかったのだろう。しかし、「そういった大事な情報を他の避難所にも共有し、厳しい境遇にあった住民のために取り組んでほしかった」と長沼さんは指摘する。

また、長沼さんは避難所にいた方々が、徐々に「攻撃的」になっていったと語った。今まで経験したことのない異常事態の生活や、毎日他人に見られながらの生活によって互いに、徐々にストレスが積み重なっていた。お腹がすくことはなかったが、おにぎりや菓子パンなどの食事が続いた。

個人からの支援で他の食べ物が届くこともあったが、避難者への必要な配給数と合っておらず、市の担当者も公平に渡すことができないため、配給できずにいた。しかも、被災者に渡せずにいた食料は、2日、3日経つといつの間にか無くなってしまう。誰かが持っていった

のだという。「通常であれば盗もうと考える人はいない。しかし、避難所でのストレスによって、普通の考え方ができなくなってしまったのだ」と長沼さんは振り返った。

経験が伝えられない2つの仕組み

24年元日に起きた能登半島地震。その被災地の避難所に、長沼さんは支援のボランティアになって赴いた。そこでも、段ボールのない避難所の状況を見た。それは5カ月にもおおよんでいたという。なぜ東日本大震災の経験が能登半島地震で生かされなかったのだろうか。長沼さんは、「行政の職員の仕組み」と「メディアの仕組み」が原因の一つであると語る。

行政では、現場を担当する職員が数年経つと、別の部署や場所に異動する仕組みがある。そのため、震災を経験した職員がその時の経験を生かすことができなくなってしまう。また、経験した職員が他の職員にそのことを伝え、問題点を共有することがなければ、行政の震災に対する対策は変わらないままである。

しかし現実には、全国の被災地の誰も、能登に経験を伝えてはいなかったのだ。そして、避難所をどのように改善していくか、どのように運営すれば良かったのか、経験と反省が生かされず、共有されないまま、新たな被災地が生まれてしまったのである。

一方で、メディアでは東日本大震災の発生当初、被災地の様子が頻繁に取り上げられていた。中には、避難所の様子や問題点などが放送されていた。しかし、避難所のニュースが最後まで取り上げられることはなかった。仮設住宅での被災者の新生活が始まれば、そちらの方ばかりが注目され、避難所が忘れられたようになってしまう。そのため、「避難所をめぐる問題は解決されたかのように捉えられてしまうのだ」と長沼さんは語る。どのように解決したのか、または解決しなかったのかが報道されないため、記録としても残らず、その次に生かすことができないのだ。

いつか起こる「次の震災」に備えて

避難所は、私たちの命を守るための場所である。しかし、東日本大震災や能登半島地震のように、いずれまた大災害は起こってしまう。私たちは、いつか起こる「次の震災」に向けては、過去が忘れられ、何も対策をしないまま過ごしてしまっているのが現状である。被災者の辛い経験を無駄にしまっているのだ。

避難所の経験を伝え続け、十分な準備と対策を行っていくことで、より多くの人が安心安全に暮らすことができる避難所を作り上げていくことができると考える。「きっと私たちは大丈夫」という考えは捨てて、「いつか私たちも」という危機感を持ってほしい。震災は

いつどこで起こるか分からない、予期せぬ時に起こるものである。自分の命、みんなの命を守るため、私たちは共に備えていかなければならない。

伝わらなかった「心」～閑上の被災者が語ってくれたもの

「他者の心を共有する」ということができるのならば、この世界はきっと平和になるだろう。しかし、それは簡単ではない。「心」は形として現れず、目に見えず、他者と思いを伝え合うことも難しい。東日本大震災の被災地、名取市閑上を訪ね、取材して気づかされたことだ。そこで住民の方々にインタビューし、それ以前の私には想像のつかぬ当事者の想いがあることを知った。震災前後から避難生活、そして今に至るまで、伝えられていなかった当事者の「心」を、文字に起こして記録しようと試みた。そこから初めて見えてくるものがある。

海はきれいで楽しいもの

24年10月に閑上の集会所でお話を聞いた長沼俊幸さん＝閑上中央町内会長＝さん、櫻井幸子さん＝同副会長、民生委員＝は、閑上が「きれいで楽しい場所」、「津波なんて来ない場所」だと震災前に思っていたと語ってくれた。さらに多くの閑上の住民が、津波のことを考えたこともない、恐怖もない、それ自体に興味がないという状態であったそうだ。しかし、その想いは、津波が来たあの日で変わってしまった。高さ8.2メートルの波は街をのみ込み、そこに在った何もかもを一瞬にして消してしまい、人々に初めて恐怖という感情をもたらした。

約800人という、東北の被災地の旧町単位としては最大規模の犠牲者、行方不明者を出した閑上。その背景には、長沼さんらが語ったように「津波なんて来ない」という住民の思い込みがあった。実際には、過去にも津波が来ており、『地震が来たら津波に用心』という昭和三陸津波（1933年）での先人の警句を刻んだ石碑もあったのに、その記録、記憶は時と共に風化していったのだ。

失われていった「心」

震災で街も家も失われた閑上の住民は、2か月半の避難所生活を強いられた。そこでの実態を長沼さんは特に強く語ってくれた。メディアや行政が伝えない苦労があったという。

「当時の避難所ではプライバシーはなく、段ボールの仕切りもなく、誰が何をしているのかが丸わりの状態だった」。さらに、いつも同じおにぎりや菓子パンの食事や、他人の生活

音などの小さなストレスが積み重なることで、同じ境遇のお互いを「寛容に受け入れていた心」が、「攻撃的な心」へと豹変していったのだという。

「支援物資をひそかに取ってゆく人や、市の担当者に強く当たる人、赤ちゃんの泣く声にも怒る人が現れた。しかし、それらを悪いと思う者はほとんどおらず、こうなってしまうのも『仕方ないことだ』と割り切るしかなかった」。長沼さんは、この「平常心」を保てない心が誰にでもあることを、震災を知らない人に特に伝えたいことであると語った。

あの日から今に至るまで

あの震災から 14 年が経つ今、震災によって傷を受けた人とどう向き合っていけばいいのか。閑上の多くの住民は、津波が起きて自分たちの古里が一瞬にして消えても、閑上の街を想い、また現地に再建されたこの街に住んでいる。閑上に戻った住民は震災以降、海を憎いと思った人はおらず「あの時は津波が悪かった」と、今でも海が楽しい場所である想いは変わらないと長沼さんは語る。

一方で、今でも仕方がない出来事と受け入れることができず、「あの日、こうすれば良かった」と自責の念や後悔にとらわれて立ち直れない人、恐怖などで閑上に戻ることがきかない人もいるという。

櫻井さんは震災直後、心に大きな傷を抱えていた時期があり、心理的なケアも受けた。ここでは、「その人の心の中で思っていることを認めて共感するというケアや、背中を押してあげて自立できるようなケアもあり、これが大切なこと」と語った。

長沼さんは「心にトラウマを抱えているが、平常心を偽っていてどれくらい辛かったのかわからない人との向き合い方が難しい」と語っている。また、震災から長い年月が経ってから当時の想いを打ち明ける人もいる。そのため、「家族的なつながりを以て、年単位の長期的なケアが大切」と語り、「震災という出来事から人とのつながりがどれだけ大切であるかを学んだ」という。その言葉は、私たちが日常を過ごしていく上でも大切なことではないのだろうか。

記事を読んでもくれた貴方へ

私は閑上を訪ねる以前、多くの住民が閑上に住みながらも、どこかで海を憎んでいるのではないかと思っていた。しかし、実際に住民の声を聴き、それが違うことであると知った。そこで出会った人たちは、海はきれいで楽しくて、震災前の閑上の街が好きだった、という変わらぬ想いで当時の出来事を語ってくれた。私は取材をする現場でそういった想いを聴き、

泣き出しそうになるくらいに心を打たれた。

一方で、自分がまだ震災のことを表面的に考えていたことを再認識させられた。そして、東日本大震災という 14 年前の出来事がどれだけ恐ろしくて、被災者の心に深い傷を残しているのかを学んだ。

この記事を通して、震災を知らない多くの人々が、当事者の「心」に触れ、共感してもらえたら。そして、災害への関心、備えることの大切さを胸に刻んでほしい。

「情報」が救う未来の被災地～関上の経験から考える

あの時、あなたは何が知りたかったのか？ 2011年3月11日に起きた東日本大震災から14年が経つ。震災のただ中、避難所の生活、仮設住宅に移っての暮らし。他の場面でも必要とし、知りたかった情報は星の数ほどあっただろう。被災者の一人で関上中央町内会長の長沼俊幸さん（61）を取材し、「あの時」を振り返ってもらった。語られたのは、必要だった情報発信の不十分さ、後から知った時のやるせなさ、憤り。私たちが被災者となった時の課題や、その先を展望できる支援など、「情報」にフォーカスして考えてみたい。

避難所生活の中で知りたかったこと

長沼さんが話す中で、ことさら強く主張していたことがある。それは避難所生活においての段ボールの有用性である。避難所生活では、段ボールの仕切りがあるだけでプライバシーが確保され、居心地が格段に良くなる。しかし、それが導入されたのは、避難所生活の終わり近くの5月に入ってからだった。他の避難所では、最初から段ボールの仕切りがあったというにもかかわらずだ。同じ仮設の入所者が偶然にそのことを知り、長沼さんが市の担当者に質して初めて分かったという。

ペットと一緒に過ごせない避難所生活で苦しい思いをした人もいる。その人も、「ペット同伴OK」の避難所があることや、一時預かりしてくれるペットセンターがあることなどを、すべてが終わってから知ったようだった。他にも、生活再建の助成金やライフラインの復旧、仮設住宅についてなど、知りたい情報はたくさんあったはずだ。

長沼さんの話からは「もっと早く知ることができたら」という怒り、やるせなさを感じた。もし、知りたいことがきちんと知れていたら、避難所やその後の生活で苦しい思いを減らせたのではないだろうか。これらの経験を、今後起こる震災に活かすためにどうすればよいか考えてみようと思う。

全ての被災者に情報を共有してもらうには

当時の避難所では、どんな情報の利用の仕方があったのだろうか。長沼さんの話によると、行政はホームページや回覧、張り紙などで情報を伝えていたという。しかし、これだけでは情報を共有してもらうには不十分である。パソコンや通信環境がない場所や、年配者ら「I

「弱者」はホームページなんて見ることができるのだろうか。余裕がない生活状況で、回覧や張り紙にじっくりと目を通すことはできるのだろうか。

「せめて1日に20分だけでも、行政の人が情報を丁寧に伝えてくれる場があれば」と長沼さんは振り返った。確かに、行政の人が避難者の前で直接伝える機会があれば、情報の共有もスムーズにできただろう。また、知りたいことを書いて入れることのできる質問箱のようなものを避難所に一つ設置することでも、貴重な情報源となり、さまざまな改善に行政も対応しやすいのではないだろうか。

被災者は知りたいことを行政に伝え、行政は被災者が知りたがっていることを伝える。そんな意思疎通の仕組みが日常にできれば、震災後の生活の中で生まれる不安もストレスも幾分か減らせ、先を考える余裕も生まれるだろう。

家ごと流された屋根からの110番

長沼さんは震災時、津波で流された家の屋根の上で奥さんと共に一晩過ごした。助けを待つ中で、長沼さんは110番に電話をしたが、サービスの管轄が違うために「これから言う番号を控えて、そちらに電話するように」と指示されたという。長沼さんは、身一つで寒さと不安の中にいた屋根の上で、「どうやって番号を控えるのだ」と憤ったそうだ。もし、110番する人の手が傷ついていたら、メモできるような状況ではなかったら、どうするのだろうか。最後の頼みの警察さえもこのような対応しかできないとしたら、運用の制度そのものを見直す必要があるだろう。

SNSでの救助要請にも課題と工夫

助けを求める際にSNSを使う人もいた。SNSを利用する救助要請は、迅速かつ広範囲に拡散することができる。しかし、この方法にはいくつかの問題点がある。例えば、通信環境の制約や救助リソース（利用できる資源）の分散、また救助要請がほかの多くの投稿で埋もれる恐れもある。

特定のハッシュタグを使えるようにしたり、緊急度に即した分類システムを導入したりするなどの工夫が必要である。そして、これらのことを周知させなくてはならない。情報が入ってこないという問題点があった一方で、発信したSOSを受け取ってもらえないという課題もあったようだ。さらに受け取った情報にどう迅速、適切に応えるのか、行政も私たちも見つめ直す必要がある。

さまざまな体験を情報にして未来へ

ここまで情報という観点から、課題と解決の方策を考えてみた。しかし、一番大切なのは過去の震災の教訓を未来へ紡いでいくことではないだろうか。震災が起きたこと、その被害、被災地での人々の懸命の工夫など、さまざまな体験を「情報」にして、多くの地域につないでいくことが大切だ。情報は目に見えないが、災害から人々を守る最大の備えである。情報一つで何千、何万の命を救うことができるかもしれない。いま一度、過去の災害を振り返り、これまでの被災者たちが切実に求め、必要とした情報を、これからの災害に備えて掘り起こすべきだ。

災害の「心の傷」を癒すとは？ 閑上の当事者から学ぶケア

2011年3月11日に起きた東日本大震災。宮城県名取市の沿岸は大きな被害を受け、市民964名が亡くなり40名が行方不明となった。そのうち閑上地区は名取川南岸の太平洋に面する場所に位置し、漁港の町であったが、住宅密集地で多くの住民が津波の被害に遭い、一瞬にして約750人の命が失われた。自分の住まいや大切な家族が一瞬にして失われたというショックの大きな体験から、住民の心にも今なお深い傷ができたという。それは日常生活にも支障をきたしているようだ。どうすれば癒せるのだろうか。閑上の当事者に聴いて考えた。

震災のトラウマを少しでも和らげたい

震災以来、日常生活の少しの揺れにも過敏に反応し、今なお「あの時どうなってしまっていたんだろう」と考え込んだりする住民さんがいる、と授業の閑上取材で知った。そのような心のトラウマ（心的外傷性ストレス）を少しでも和らげ、安心した生活を送ってほしいと思い、私たち大学生が出ることや、どのような活動が心の傷を癒やせるのかを考えた。

尚絅学院大学にはボランティアチーム「TASKI」がある。2012年の結成以来、被災した閑上住民が暮らした仮設住宅に通い、集会所でお茶会を催したり、クリスマス会や自治会のお祭りの支援をしたり、住民同士の楽しいと交流のきっかけ作りを重ねた。名取市復興文化祭への住民参加やカラオケ演芸大会開催など、やりがいや生きがいの目標のきっかけもつくった。

閑上の街が現地に再建された後、2019年に発足した閑上中央町内会でも、お茶会などの交流を続け、町内会主催のイベントのお手伝いなどを行っている。仮設住宅から新しい街へと環境が変わって、閑上のコミュニティが再びバラバラになった時期にも、新しいふるさとづくりを応援するなどの「寄り添い」は変わらない。そのような活動が心の支援にも繋がり、話題も豊富になり、閑上の住民たちの心を明るくしてきたのではないかと思った。そのような交流は私たちにもできることであり、心の傷を癒すことに大学生として役割を果たしていけると思った。

震災に対するやるせない感情、心の問題

震災で家族を亡くした人は、先が見えなくなってしまうたり、少しの地震の揺れにも過敏に反応してしまったり、当時を生々しく思い出したりする。震災後もやるせない感情が付きまとい、なかなか前向きになれない方もいる。そんな話を閉上の住民の一人から電話を通じて聞いた。そのような人にも、話すことさえ苦痛な感覚に陥る時があるのだろうか。

町内会長の長沼俊幸さん（61）は「津波から助かった次男が、それから8年して初めて、当時の出来事や亡くなった中学校の友人について泣きながら話した」と大学の授業で語ってくれた。心の傷は簡単には癒えないものだとすることを改めて実感した。

話を伺った住民からは「海が憎いというような感情は特にはない」、「特に伝えたい感情は、震災直後は平常心ではいられなかったこと」と聞いた。震災が住民に与えたものは自分たちが思っている以上に「負」の影響であり、過酷なものだということを痛感した。

訪ねて話を聴く、その積み重ねから

震災で家族や大切な人住まいを失い心に大きな傷が生まれ、なかなか前向きになれなかったり、人に会いたくなくて家に引きこもったりしてしまう。そのような人たちにどのような言葉をかけて、支えていくことが大切なのか？

閉上の住民にインタビューをしてみると、トラウマを抱えて外に出しにくい人には、「実際に訪問した時に直接お話を聴き、共感してあげることが支援の一つ」。町内会副会長で民生委員の櫻井幸子さんの話だ。「訪ねてきてくれることだけでも孤立から救われる」という。それも大きな心の支援であるということを知ることができた。外に出てこられない人たちの思いを聴き、声掛けを行い、少しずつ段階を踏むことで前向きな方向へ向かっていく。そうした積み重ねが「寄り添い」なのだ。

長沼さんは教室の質疑で、仮設住宅で暮らした当時を振り返り、「大勢の支援者が来てくれたけれど、『また来ます』と言いながら来なかった人は多く、そんな時は住民にとって心のショックが大きかった」という話をしてくれた。当事者との信頼関係は、顔を合わせて話すことを、時間を掛けて継続することからしか始まらない。それが心

に傷を負った人への支援であり、私たちにできることだと学んだ。

心が求め続ける「故郷」～形でない「復興」を目指すには

「故郷」を思い描くとき、そこに映る風景は何だろう。懐かしい家並みや、学校の記憶か、家族や友たちの姿だろうか。では、そんな思い出をどこにも見出せない新しい街並みを見て、それを故郷と言えるだろうか。見慣れた顔がどこにも見えない場所を、故郷と思えるだろうか。東日本大震災で、甚大な津波被害を受けた名取市閑上。かつての窮屈で古い漁港の街は、広い更地に変えられた。それでもなお、難しい選択を経て「現地再建」の街づくりの道を歩んだ閑上の当事者たち。14年を経た今の思いを聴き、故郷を故郷たらしめるものはどこにあるのか、考えた。

閑上という町と現地再建への曲折

授業で閑上の人々取材した。震災以前の閑上について尋ねると、「人と人の距離が近い混み混みとした町で、近所付き合いも活発な安心できる」地域であったと語ってくれた。特に印象的だった話がある。閑上中央町内会長の長沼俊幸さん（61）が語った、「震災以前は出掛けるときも家に鍵を掛ける習慣はなかった。掛けている人のほうが珍しいくらいだった」という話だ。取材した他の方々が話すのも、示し合わせたわけでもないのにこのエピソードだ。それが住民たちにとって、故郷である閑上の生活を象徴するものだったと言えよう。

物理的にも心理的にも距離感が近い、人情温かな町であったことが窺える。名取市図書館が公開している古写真のアーカイブで調べてみると、密集した家々と賑わう漁港、祭りを楽しむ多くの人々の様子が見られた。海岸に向かって広い更地が延びる今の閑上には、かつての町の姿を感じさせるよすがは少ない。しかし、故郷の様子を語る住民たちの目には、当事者でない私たちには決して見えない景色が、確かに今も映っているのだろう。

当事者にとっての「復興」とは、「故郷」を取り戻すための試みだと思う。そして、そのためには何を以て、そこを故郷とするのが問題となる。あるいは、それを土地そのものに見出す人もいる。震災から数年間、閑上をめぐる「復興」の議論は、内陸移転と現地再建の選択の間で揺れた。

住民の希望と名取市の間では幾度か対立が起こり、住民の間でも意見は割れた。取材によると、現地再建が選ばれたのは市側のこだわりによる方針が大きく、住民の中で現地への帰還を望んだのは全体の3割ほどであったという。このことにも、被災地の人々にとって「復

興」とは何か、ひいては故郷の本質はどこにあるのかという問いの難解さがある。

「復興はもうない」失われた暮らしと郷愁

閑上で生まれ育ち、津波を経験した長沼さんはこう語る。「津波に遭って閑上ででの生活を諦め、離れていった人は多い。だから私が考えていた復興が実現することはもうない」。長沼さんは当初、内陸の安全な土地に移って、閑上の仲間たちとまた一緒に暮らすことを希望していた。しかし話が進んでいくうちに、いつの間にか市が主導した「現地再建」の流れになっていたという。

再建された閑上に家を建てて数年が経つ頃、真新しい街の風景にふと「寂しさ」を覚え、長沼さんは気づいたという。「復興」の主体とは、そこで共に生きる住民たちであったのだ、と。長沼さんが目指した「復興」の姿は永遠に失われたことを意味した。

昔と同じ場所に暮らしているはずなのに、切ないほど望郷の念に駆られる。それはひどく残酷なことだ。故郷での生活を二度と取り戻せないと悟った長沼さんの絶望が、どれほどのものであったか、当事者でない私たちには想像することさえ難しい。「復興はもうない」。語られたその言葉には、凄絶なほどの重さがあった。

「故郷」とは、暮らした人々が共有するもの

「故郷」を故郷たらしめるものは何か。それは人によって捉え方は異なり、決定的な答えはない。しかし、長沼さんの取材を経て、故郷とは、必ずしも風景や場所など物理的なものを指すのではなく、人と人の日々の交流やつながり、信頼ある関係性の蓄積、つまりは暮らす人たちを以て定義されるのではないかと私は考えた。ならば、形でない、真なる意味での「復興」を果たすにはどうすればよいのか。その一つの答えが、やはり長沼さんの言葉の中にあった。

「互いに鍵を掛けない生活は、戻ってはほしいと思うが、それはもうできない。でも、そういう街の生活があったことだけでも知ってほしい」

そのことが、私には「復興」の条件の一つに思えた。それは、いくら国や市役所の予算が投じられようと、誰も知りもしないものを造ろうとすることは決してできないからだ。そこに暮らした人々が共有できる目標を持つことである、そう強く感じた。かつての生活を完全に取り戻すことは限りなく難しい。しかし、話さなければ、聴かなければ、その過去がなかったことになってしまうのではないかと。そんな住民たちの恐れに向き合うこと。それは私たちができる、間違いなく意味のある行為だ。

風化していた石碑の事実～今後教訓をどう生かすのか

過去に起きた出来事が、やがて誰の記憶からも薄れ、風化していく。それは恐ろしいことではないか。東日本大震災の津波被災地、名取市閑上を取材で訪れた際、地元・閑上中央町内会長の長沼俊幸さん（61）が古い石碑の前でこう語った。『地震が来たら津波に用心』。石碑にはそんな警告が刻まれている。ところが、住民たちは「閑上に津波は来ない」と信じ、大惨事につながったという。なぜ、そんなことが起きたのか。その事実をまた教訓とし、次の世代へと語り継ぐことこそが、第一の防災と言えるのではないか。

風化していく記憶～次の世代にどう伝えるか

東日本大震災が起きてから 14 年が経つ今、当時生まれていない子供ら、震災を知らない世代が増えていると耳にしたことがある。

今後、このような世代とともに震災の記憶も薄れていくかもしれない。そこで思う。当時震災を実際に経験したことがある世代、つまり私たちこそが震災の出来事、教訓を次の世代に伝えていくべきなのではないか。

当時、私は 4、5 歳で幼稚園の年中組だった。丁度おやつを食べようとするタイミングで揺れに襲われ、その後しばらくの間、停電で電気が付かず、懐中電灯で生活していたことを覚えている。テレビからは震災による被害の報道ばかりが流れていたのが、子供ながらに印象に残っている。家々が瓦礫になってしまい、行方不明になった家族を探す人々の映像が頭をよぎっている。

これらの震災の事実を今後、どのように次の世代へ語り継いでいけばいいのか。そのような思いで今回、長沼さんにインタビューを行った。

石碑に刻まれた教え～何故忘れてしまったのか

長沼さんが生まれ育った名取市閑上は、漁港の歴史が 400 年来続き、地元の海で捕れる赤貝などの魚介が有名である。震災前は、自宅に鍵をかけずに外出するような習慣があり、近所の人が冷蔵庫の中におすそ分けをよくしていたほど、お互いに信頼が厚く、繋がりが濃い街であった。

古き良き慣習とともに暮らす人々には、「閑上には津波は来ない」という考えが根付いてい

たという。3月11日に自宅で被災した長沼さん自身、「祖父からも『津波は来ない』と聞いていたため、津波がどんなものか分からず、いまひとつピンとこなかった」と語った。

長沼さんを取材した中でも、石碑に関する話が特に私の印象に残った。なぜ、石碑に刻まれてあった警告を誰も信じず、忘れてしまったのか？ それは、日和山公園に立つ大きな石碑だ。1933（昭和8）年3月3日の昭和三大陸大津波の後、当時の住民が『地震が津波に用心』と教訓を刻んだ。それにもかかわらず、時が経つにつれて教訓も石碑そのものも忘れられ、本来語り継がれるはずだったものが真逆の誤った情報に変わり、伝承されてしまったのである。

当時の記憶を石にまで刻むことは、次の世代に二度と同じような災厄を繰り返してはならないという伝言であり、地域の防災意識の絶えざる向上を目的として建てられたはずであった。が、その役目を果たすことなく、その存在を思い出されることなく、人々の記憶から風化してしまった。忘れ去られることが最も恐ろしいのではないかと私は考える。

教訓を「風化」させないためにできること

私の郷里は大災害の痛手を受けた地域ではなく、テレビの報道を通してしか地震や津波の姿を知らなかった。実際に体験した人から震災の恐ろしさや避難所での生活の苦難などを聴くと、改めて震災の見え方がまた変わってくるのを感じた。

自分の知らない場所で苦しい生活を強いられてきた人、現在もやるせない思いを抱えながら暮らしている人がいる—という事実を知った以上は、自分の記憶に留めておくだけでなく、外につなぎ、伝承していくべきである。

最後に、過去に起きた震災の出来事を「風化」させないために重要なことは、まず身近な家族や友人に話すことが大切であると考えた。石碑のように単に過去の記録として残すだけではなく、人と人との間で肉声の体験談として伝え合い、次の世代へ繋いでいくことで、一つの記憶がより鮮明な形で共有されていくからだ。

この記事を読んでいる読者の皆さんも、記憶が「風化」していくという意味を一度考えてみてほしい。震災といった事実を分かち合うことで、いつまでも忘れられぬ記憶となり、多くの人の未来を守り続けるのだから。

被災者になるという体験～震災を知らぬ世代に伝えたいこと

東日本大震災が起きる前、名取市閑上は長閑な漁師町で、人口はおよそ 7500 人。暮らす住民の多くは自宅に施錠しないことが当たり前なほど、近所付き合いが濃かった。逆に施錠している方が怒られるくらいだったという。この町の人たちは「つばめが巣を作る家は栄える」という言い伝えから、つばめを縁起物として大事にしており、つばめが巣をつくりに来てもらえるように、3～9月にかけてはほとんどの人が家を開けっ放しにしていた。閑上の住民たちは、この生活がずっと続くと思ってやまなかったという。そう、あの日までは。

「津波は来ない」と誰もが信じ

2011年3月11日午後2時46分。閑上を大地震が襲い、大津波警報が発令された。しかし、閑上の住民の大半は逃げなかったという。なぜなら、「町に津波が来ると考えてすらいなかったし、津波は牡鹿半島が弱らせるから大丈夫、という根拠のない言い伝えを信じていた」＝閑上中央町内会長の長沼俊幸さん（61）＝からだだった。また、これらの言い伝えは、仙台平野に津波が来ない理由として語られていたという。

現実には、閑上では日和山（高さ6.2メートルの築山）を越える8.4メートルの津波が、あっという間に町をのみ込んだ。そして、閑上では行方不明者を含めて死者750人余りと、旧町単位では東北最多となる甚大な被害を出した。

長沼さんは津波が来た時に奥さんと二人、家の屋根に上って避難し、そのまま2キロも流された末、翌日に自衛隊に救助されて、避難所で暮らすこととなった。

ストレスが重なった避難所暮らし

それから2カ月半の避難所での生活。長沼さん曰く、「暮らしは心が折れそうになるほど劣悪だった」という。まず、プライバシーがなかった。自分たちが食事している

ところ、就寝しているところ、会話しているところを毎日のように人に見られながら生活しなければならなかった。水も通っていないから、外にある仮設トイレは大勢の人が使うし掃除もしないから汚く、臭かった。そして、風呂にも入れないし、電気が通っていないからテレビも見られない。食事は支援物資のおかげでひもじい思いをすることはなかったが、朝昼晩のご飯は菓子パン、おにぎりと同じものばかりだった。

避難者たちはそんな小さなストレスが重なって我慢の限界になり、避難生活から数週間経った頃には避難者たちは次第に攻撃的になったという。赤ちゃんが夜泣きすると、「うるせえ!」「出てけ!」と親に向かって怒鳴り声が上がった。また、高齢の避難者はトイレも一苦労で、なおかつ行く間隔が近い。「そのせいでトイレが遅くなる」というクレームも入るようになり、高齢者は遠慮から、夕方を過ぎたら水を飲まなくなって脱水症状になる人もいたという。

また、避難所生活においてプライバシー確保の間仕切りになり、ベッド代わりになるなど、必要不可欠となるのが段ボール。長沼さん一家が避難していた避難所には段ボールがなく、たまたま別の避難所では段ボールがたくさんあるという情報を耳にして、長沼さんは憤りを感じて抗議した。運営していた市の担当者は「この避難所で段ボールが欲しいといわれなかったから」と言い訳をしたという。

避難所生活の実態を聞いた私は、2カ月半続いた入所期間は避難者にとって、とても長く辛い時間だったに違いないと考えた。

仮設住宅での暮らし、閑上への帰還

避難所での2カ月半を経て、長沼さん一家は仮設住宅での生活を始めた。仮設住宅では人の目を気にして生活する心配がなく、風呂にも毎日入れて、トイレも清潔で、テレビも見られ、台所の必需品も整っていた。避難所での生活に比べて不自由がなく、人間らしい生活ができることから心が軽くなる思いだった。

やがて、先行きの生活再建が被災者の目標になる。閑上の人々の多くは、津波体験の怖さから、安全な内陸へ集団移住を希望していた。長沼さんは「閑上の仲間とまた一緒に暮らしを始められるなら、どこでも、それが『復興』だ」と考えていた。

しかし、名取市の「現地再建」の方針に固執し、多くの被災者の意向を押し切る形で決着させた。長沼さんが新しい閑上の街に帰還したのは2017年6月30日。閑上で再出発に希望を託し、住宅の再建を決めた。家族は皆が賛成してくれた。

新居は、津波で流された家のローンが残るのもやむなく建てたという。そこに備えられたのは最新式の玄関の鍵。使い方を業者の方から教えてもらった時、「閑上に50年住んで、鍵をかける暮らしはしたことがなかった」と震災前の暮らしを懐かしんだという。

「復興」という言葉が一番嫌い

長沼さんは町内会長も引き受け、一家が閑上に建てた家には23年6月、震災を挟んで13年ぶりにつばめが宅に巣を作りに来たり、かつてのご近所さんも閑上に戻ってきたり、ようやく平穏な日常が戻ってきた。

しかし、かつての閑上の仲間には、津波の体験やトラウマ（心的外傷性ストレス）、新たな震災への不安から、内陸に移住してしまった人は多い。そして長沼さんは、広大な更地も広がる現在の閑上の風景で、震災前の家がどこにあったのかということも思い出せなくなっているという。

「復興という言葉が一番嫌い」

長沼さんは、この言葉をずっと語っていた。なぜなら、閑上によりやく戻れたにしても、震災前の暮らしや人との繋がりは元に戻ったわけではない。「復興って何なのか、と問うても答えられた人はいないし、誰も分からない」

私はこの一言から、被災者が震災によって負わされた心の傷が一生癒えることのない深いものだった、と理解できたような気がした。この記事を読んでいる、震災を知らない人たちには、すぐにはピンとこないかもしれない。けれども、被災者は震災で負った心の傷とともに生き続ける。だからこそ、その声を伝えなくてはならないし、震災を風化させてはいけない。

次世代に届けたい教訓～震災の被災者に学ぶ「事実」

東日本大震災からもう 14 年、当時まだ幼稚園に通っていた自分も大学生となった。名取市閑上地区を訪れ、実際に震災を経験された人から直接お話を聞く機会があった。かつての自分は何も知らなかったという事実に驚き、心が苦しかった。そして、自分に何ができるかを考えた時、この事実を後世にしっかり伝えることではないか、こうすれば少しでも心の負担を軽くできたんじゃないか、そんな気持ちになった。記録として残すことで、後世の人に繋がり助かる命も多くなる。読んでいる人も一緒に考えてほしい。

忘れられた震災の記憶

名取市の海辺に位置する閑上は、震災前、約 2500 世帯、6000 人が住んでいた。2011 年 3 月 11 日の津波で 750 人が犠牲となり、38 人が行方不明。東北の被災地の旧町単位で一番多い犠牲者数だったという。取材で訪れた際に、閑上中央町内会長の長沼俊幸さん（61）は震災遺構の日和山を案内しながら、あの時のことを話してくださった。一番驚いたのは、「閑上に津波が来るとは誰もが思っていなかった」という証言だった。

閑上は海が見える、きれいな町であるが、震災前、住民の誰もが津波を警戒していなかった。「震嘯記念」という石碑があり、「地震があつたら津波の用心」と 1933 年の昭和三陸大津波での被災の記録が刻まれているが、住民の誰もがその伝承を忘れたまま、津波は来ないものだと思われてきたという。それが大きな被害となってしまったのだ。

被災者の声を聴く

閑上の集会所で 2 人の住民から話を聴いた。1 人は、町内会副会長の櫻井幸子さん。震災前、結婚を機に閑上に住んだ。地区の民生委員でもある。あの日の津波で夫を亡くし、ペットも行方不明になり、そのショックなどから人と会うことが嫌になっていたという。

震災後、民生委員になってほしいと請われても断っていたが、やがて「自分はまだ生きていだけでありがたいと思うようになり、今の活動を続けられている」と振り返った。民生委員になってさまざまな人と話をする機会があるが、「たとえ町が復興しても、家族を亡くした人は気持ちの復興ができていない」と言う。

その中で常に、「話を聞いた時に相手を認めて少しでも褒めること、生きて人と接することができることに感謝すること。それを忘れないようにしている」。自分自身もいまだ辛い体験を乗り越えていなくても、周りの人のために心を配れる。そんな櫻井さんは凄いなと感じた。

インタビューをしたもう一人は、吉田ようこさん。閑上出身で、震災が起きた当時は愛犬の散歩の帰り道だった。家を流されて、43日間の避難所生活をした。避難所では「周りの人たちが温かく、優しい人ばかりで、物資の面では苦労したが、あまり大変ではなかった」と振り返る。「避難する際にも愛犬を持ってくれたりし、生活している中でも互いがみんなのために動いてくれて、辛いことがなかった」

そんな話を聴いて、閑上の人々の絆というものがいかに強く結ばれているか、分かったような気がした。現地再建された閑上の街の整備は進んでいるものの、病院や銀行などがなく、困っていることもあるそうだ。しかし、2人の話で共通していることは、震災前のような人と人の関わりが少ない寂しさだという。

教訓を受け継ぐ

閑上が震災で多くの人命を失うに至った理由として、過去の津波が今にしっかり伝わっていなかったことがある。前述の昭和三陸大津波の後に建てられた石碑のように、「地震が来たら津波に用心」と教訓が刻まれていても、誰も知らなかったことが現実である。

これまでテレビなどでしか知らなかった知識が、当事者の話を聴いたことによって、初めて実感として分かったことが多くあった。私の郷里、岩手県の被災地をかつて訪問した際も、津波から逃げる時の声のやり取りがなく逃げ遅れた人がいた事実や、避難所での生活が想像した以上に大変だったことを知った。全てにおいて「情報の伝達不足」という言葉が共通していた。また、「周りの人の存在が一番の心の拠り所になった」という話も聞いた。

私自身も、何か力になることがあれば積極的に取り組みたい。被災者から聴いた貴重な話を、このように文字に起こしたり、声に出したりして伝えていくべきだと考える。

未来に向けた備え

自然災害というものは、いつ来てもおかしくない。いざ災害が起こるという想定で過去の教訓を学び、生きた情報を知ること、被害を減らすことができ、災害の後の生活を少しは不自由なく変えてゆけると思う。

繰り返しになるが、今回の取材のように記事にしたり、実際に声に出したりすることで、多くの人に知ってもらえることができる。広く伝達することができるのだ。これを読む人も、

自分には何ができるかを考え、ぜひ行動に移してほしい。みんなで協力しあっていこう。

終わらない「復興」の在りか～閑上の街の過去と現在～

2011年3月11日の東日本大震災から14年が経過する。津波によって大きな被害を受けた被災地では、さまざまな形で復興を模索してきた。宮城県仙台市若林区荒浜は、住民の反対があった県道の5メートルのかさ上げによって海が見えない街になり、海岸から3キロ圏内が災害危険区域となって家を建てることができなくなった。岩手県宮古市田老では、市が防潮堤を最大で12.8mという日本最大級の規模に改修するという計画を立て、住民を賛否両論で分断した。「正しい復興」とは何だろうか？ 授業で名取市閑上地区取材し、そこで見えてきた復興の在りかとは何か、どのような復興が望まれるか、考えてみた。

閑上の震災後の歩み

名取市閑上はあの日、最大9.1メートルの津波で犠牲者が約750人に上る壊滅的な被害を出し、一時期は全住民が避難生活を余儀なくされた場所である。

その後、同年11月に名取市の復興計画が策定され、16年には基本区画の整備が始まった。18年には公園や集会所、避難タワーなどの公共施設が整備され、災害公営住宅600戸以上が完成。その後、19年4月には複合型商業施設「かわまちテラス閑上」がオープンし、「ゆりあげ街びらき」のセレモニーが実施された。そして20年3月、山田司郎市長が現地で「閑上の復興」を宣言した。

一見、順調な歩みにも見えるが、ここでひとつ考えてほしい。それは、本当に住民が望んだ復興なのだろうか、ということである。観光客とともに移住者が増え、街ににぎわいが戻った現況はあるが、私はこの「復興」の在り方が正解だったとは思えない。なぜなら、今の閑上は過去の趣を感じさせることのない、全く新しい街になっているからである。

過去と現在の街のギャップ

皆さんは、震災前の閑上の姿をご存じだろうか？ そのころ閑上の海岸の手前まで住宅が広がり、古い趣ある漁師町という、今からは想像できない姿があった。被災者で新しい閑上の住民でもある荒川裕一さんは「震災前は近所付き合いが深く、みな顔なじみだった。見たことのない人が入っただけで話題に上るほどだった」と言う。閑上中央町内会長を務める長沼俊幸さん(61)も「かつては家に鍵をかけなくても心配なく生活できるほどだった」と語った。

そんな閑上は、あの日の一瞬の津波で消えてしまった。長沼さんによると、地元で震災前の景色として今も見ることができるのは日和山(海拔6.2メートル)だけである。

日和山は震災後、映画『君の名は。』、『すずめの戸締り』などで知られる新海誠監督が訪問したことで知られる。日和山の景色は後に劇場作品『天気の子』の場面描写として登場した。そんな古里喪失の状況から現在までの歩みは、住民から見れば、想像もできない変化だったことだろう。

震災前からの住民の一人、阿部シズさんによれば、「震災後の閑上は、全く新たな街に変化してしまいびっくりした」。前述の荒川さんは「震災前の閑上と現在で、町は大きく変わったが、住民の心は全く変わらないと思う」と語った。また長沼さんは「仮設住宅から出る時に、なぜ、被災して何もなくなった閑上に戻らないといけないのかと感じた。それよりも、住民みんなでどこかに移住できればよかった」と振り返る。

住民にとって閑上の変化は、余りに大きいものがあったと読み取れる。それを顧みれば、やはり閑上の街は、現状が復興のあり方として正しいのか疑問に感じる部分がある。

住民の望む復興とは何だったか

閑上では、現地再建か、海から遠い内陸部に移転か—という論争と対立が、行政と住民の間であった。

名取市は現地の声を反映するために 2011 年に「名取市新たなみらい会議」という公聴会を催した。そこでは新たな住宅再建の在り方についての議論があり、市は「閑上地区は被災地復興土地区画整理事業を活用し、現在位置での再建を目指す」との方針を打ち出した。それが住民の望んだ街づくりになっていたのか。

朝日新聞デジタルの記事<閑上地区の復興遅れ、住民反発も 宮城・名取市が説明会>(2013年8月18日付)によると、名取市が住民に説明会を実施したが、閑上の現地再建案に賛成する人がわずか3割で、反対意見が大多数だった。そのため市は住民の想定人口3000人から2割減らし、住宅用地を海拔5メートルかさ上げして、面積も45ヘクタールから32ヘクタールに減らした。しかし、災害公営住宅の整備も遅れ、住民から行政に対し居住者が1割にとどまることにも反発が生じていた。

荒川さんはこう証言する。「仮設住宅では生活用品や食品などの支援があったが、それがなくなる先行きに不安があった。仮設住宅で知り合った住民同士もいい関係を築けていたのに、閑上に戻ることで関係が崩れるのは残念と感じていた」。

長沼さんも「仮設住宅を出る時、震災前に建てた家のローンが残っていて、出た後にどのように生活すればよいのかと悩んでいた。愛島東部仮設住宅から閑上に移る時に、土地があったのでそこを借りて再建した」と話す。つまり、住宅ローンを二重に抱えたまま閑上に帰還し、新しい生活を始めたのである。このように閑上に戻ることに不安を抱えていた住民は多かったと思われる。

震災前の閑上の姿を知ってほしい

閑上を取材して感じたことは、今のきれいに整備された閑上の街ができるまでには、行政と住民の間の対立があり、それ以前の「鍵をかけずとも生活できた」という閑上との大きな隔たりがあったと感じた。

ぜひ、この記事を読んでもくれた皆さんには、震災前の閑上では近所付き合いが深く、人間関係が濃い漁師町があったことを知ってほしい。その姿を伝えることで、本当の「復興」とは何かを考えてみてもらえるのではないかな。

長沼さんは「復興というものはない。誰に問うても、答えてくれた人はいない」と語っていた。今の閑上の街からは目に見えてこない、震災の苦しみから解かれていない人、悲しみを抱えている人が多いことは事実だ。これからも被災者には、永続するような心理的支援や心理的アセスメントなどで、「心の復興」を手助けすることが必要だと感じる。これからも閑上の本当の「復興」を考え、多くの人に参加できる議論の場を模索していきたい。

(参考文献)

- ①：岩手県宮古市の事例 防潮堤に賛成派・反対派それぞれの理由 | 東北の小さな酒蔵の復興にかける熱い思い【第66回】 | TORJA
- ②：閑上の復興の歩み 東日本大震災から12年でも復興は「道半ば」 住民の1割が犠牲になった宮城県名取市・閑上から | Science Portal - 科学技術の最新情報サイト「サイエンスポータル」
- ③：名取市の被災状況 東日本大震災から12年でも復興は「道半ば」 住民の1割が犠牲になった宮城県名取市・閑上から | Science Portal - 科学技術の最新情報サイト「サイエンスポータル」
- ④：岩手県大船渡市の事例 8622. pdf
- ⑤：名取市民の社会調査 KJ00010056599. pdf
- ⑥：朝日新聞デジタル「閑上地区の復興遅れ、住民反発も 宮城・名取市が説明会」(2013年8月18日付) 朝日新聞デジタル：閑上地区の復興遅れ、住民反発も 宮城・名取市が説明会 - 3.11 震災・復興
- ⑦：TOHOKU360『何も変わらぬ能登地震の被災地 東北の当事者として訪ねた避難所で見たもの』(2024年6月10日付) [何も変わらぬ能登地震の被災地 東北の当事者として訪ねた避難所で見たもの | TOHOKU360](#)
- ⑧：名取市における東日本大震災の記録 [shinsai-gaiyou-02. pdf](#)